

北海道商工業振興審議会 第3回 ものづくり産業振興部会 議 事 録

日時：平成25年11月19日(金) 14:00～15:30

場所：かでの2・7 8階 820研修室

1 開 会

○事務局

ただ今から、「第3回ものづくり産業振興部会」を開催いたします。皆様には、時節柄お忙しい中、ご出席いただきまして誠にありがとうございます。

私、産業振興課主査の野村でございます。議事に入るまでの間、進行を努めさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

本日は、井原委員と佐藤委員が所用により欠席されておりますが、委員7名のうち5名のご出席をいただいております。委員の過半数以上が出席しておりますので、北海道商工業振興審議会条例規則の規定を満たしており、会議は成立しておりますことをご報告いたします。

開会にあたり、産業振興局長の竹内よりご挨拶申し上げます。

2 挨 拶

○竹内 産業振興局長

本日は、お忙しい中、ご出席賜りまして、誠にありがとうございます。

これまでの部会におきましては、皆様から、今後のものづくり産業の振興にあたりまして、重点化が必要と考えられる分野や取組などにつきまして、幅広くご意見をいただいたところでございます。改めてお礼を申し上げます。

今回ご議論いただいております「新たな展開方向」につきましては、これまでもご説明を申し上げておりましたけれども、本道経済の活性化を図るため、ものづくり産業を取り巻く環境の変化などに即応し、今後4年程度を見据えまして、関係者が方向性を共有するため、わかりやすいテーマを掲げ、官民一体となって重点的かつ突破力を持った取組を進めていきたいということでございます。

本日は、これまでご議論いただいた内容を踏まえまして、「新たな展開方向」、本日はたたき台ということでご理解いただきたいのですが、皆さんにご説明させていただいて、テーマや重点分野の取組内容などにつきまして、改めて皆様のご意見をいただきたいと考えております。

本日のご議論を経た後、事務的に整理をさせていただき、「素案」という形にまとめていきたいと考えております。「素案」を今後、議会に報告し、パブリックコメントを

行い、広く道民の皆さんからご意見をいただくというような形で最終的にとりまとめをしていきたいと考えております。

限られた時間、大変恐縮でございますが、忌憚のないご意見をいただければということでご挨拶にかえさせていただきます。今日はよろしく願いいたします。

○事務局

この部会は、「公開」となっており、議事録も北海道のホームページ等で閲覧に供しますことをご承知おきください。

本日は、15時30分での終了を予定しております。

それでは、ここからの進行は関根部会長をお願いいたします。

3 議 事

(1) 「本道のものづくり産業振興の新たな展開方向」の検討について

○関根 部会長

早速、議事に入らせていただきます。

「『(1)本道のものづくり産業振興の新たな展開方向』の検討について」、まず、資料1及び資料2について事務局からご説明願います。

○竹内 産業振興局長

資料1と資料2についてご説明させていただきます。

まず、資料1ですが、発言概要として表で整理をいたしました。前回の部会と同様、第2回の部会を踏まえて加筆、修正をしております。「○」印が第1回ものづくり部会、「◇」印が第2回ものづくり部会、「●」印が8月28日に開催しました「ものづくり関連団体代表者懇話会」の発言で、個々にご説明はいたしません、このような形で整理したことをご理解いただきたいと思います。

次に、資料2「本道のものづくり産業振興の新たな展開方向について」ですが、「1 策定のねらい」、「2 策定に向けた今後の取組」、「3 策定後の展開」で整理をしております。

最初に「1 策定のねらい」ですが、一部おさらいになるところもありますが、ご了承いただければと思います。「ほっかいどう産業振興ビジョン」を既に策定しており、このビジョンの実現に向け、様々な環境変化を踏まえつつ、取組を加速していきたいと考えております。加速するにあたっては、1つのテーマのもとに関係者が連携をしながら、そこに持てる施策や助成策、それからサポート機能、個々の企業にとってはその分野での頑張りといったものを集中的に投入することによって、ビジョンの実現を加速したいということでございます。四角で囲ったところが、今申し上げたと

ころの概念でございますが、ビジョンの中の3つの柱に加えて、「地域のものづくり力をアップ」をもとに、みんなで集中して、具体的には後ほどご説明いたしますが、「①～④」の4つの分野で力を注ごうではないか、それによってビジョンの実現を一日でも早く、力強く実現をしたいという考え方でございます。その下に「重点的、集中的な取組の促進」と「関係者が方向性を共有し、一丸となった対応」が書かれております。過去に、ここにも書いてありますように、20数年前に道庁としては「技術力ワンランクアップ運動」を進めた経緯もございますし、ここ10年は「エクセレントカンパニー」といった、それぞれの企業で得意分野を伸ばし、それぞれの分野でナンバーワンになろうと呼びかけをして取り組んできた経緯がございますので、同様の手法で進めていきたいと思っております。

次に、「2 策定に向けた今後の取組」でございますが、この部会の後、本審議会を12月に開催し、部会の各委員の皆さんに「素案」ということで、改めてご意見をいただきます。また、道議会にもご報告をし、幅広い意見ということでパブリックコメントも実施し、それぞれの支援機関にも意見を伺います。さらに、ものづくり関係団体懇話会を開催します。意見をいただくことに関しては、丁寧に進めていきたいと考えております。様々な意見を聞くことによって、ビジョンを実現するための「展開方向」についても理解していただけたと考えております。

次に、「3 策定後の展開」ですが、行政機関としては年度末に策定するケースが多いのですが、今のところ2月くらいに策定したいと考えております。といいますのは、国の補正予算を視野に、タイミングを逸することなく皆さんと気持ちを一緒に進めていきたいと考えており、策定後は、皆さんと意識を共有するために徹底的に説明やPRをしていきたいと思っております。後ほど素案（案）を説明しますが、実際のバージョンでは絵や色がついたものを各工場の休憩室や事務室に、少しコンパクトになるかもしれませんが、貼り出すなど徹底的にPRしていきたいと考えております。

道としては、来年度に向けて施策も検討しておりますので、厳しい財源ではありますが、何とか頑張っていきたいと思っておりますし、国の制度も過去になかった設備投資助成の制度も出来てきておりますので、そういったものをうまく活用できるよう、様々な情報提供などに努めていきたいと考えております。資料2は策定後の流れも含めてまとめていることをご理解いただきたいと思います。

○関根 部会長

本部会の検討テーマであります「本道のものづくり産業振興の新たな展開方向」でございますが、これまでの部会におきましても、策定のねらいなどについて、事務局から何度か説明がされておりましたが、後ほど資料3で具体的に検討するにあたって、今後の活用などについて、改めて説明をいただいたところです。

ここまでで、何かご質問等ございましたらお願いいたします。よろしいでしょうか。それでは、資料1と2を踏まえ作成した資料3について、事務局からご説明願います。

○竹内 産業振興局長

資料3をご説明させていただきます。タイトルに素案（案）とあるのは、たたき台という意味で捉えていただければと思います。「策定の趣旨」から「ビジョンの推進

を加速」のところまでは、資料2でご説明させていただきましたので省略させていただきます。キーワードとしては「4年」、「方向性の共有」、「重点化」、「官民一体」であります。「集中的な取組」として「『地域のものづくり力』のアップ」を基軸に据えたいと考えており、「地域のものづくり力」を上げるために4つの分野で頑張らましようということをお願いしたいと思っております。

まず、「連携力」につきましては、農林水産業をはじめそれぞれのプロの方、農家のプロ、食品加工のプロとものづくりのプロとが手を結んで成果をしっかりと出していくことを考えております。「人材力」は、女性の活用ということですが、「主役はものづくり“なでしこ”」ということで、ものづくりなでしこを応援していきたいというメッセージを出したいと思っております。3つ目の「技術力」ですが、何といたしても、ものづくりで一番重要なのが、技術を高め、しっかりとした魅力ある製品をつくることです。「一丁目一番地は『技術力のワンランクアップ』」ということで、一つ一つ技術を磨いていこうということをお願いしたいと考えております。4つ目は「経営力」で、「地域の『困った』に明日の経営の芽を見つける」ということで、足元を見つめ直していこうというメッセージを出したいと考えております。

次に、2ページをご覧ください。共通テーマの「『地域のものづくり力』のアップ」です。自分たちの周りに徹底的にこだわって、地域から新しい需要を掘り起こし、地域から日本、日本から世界へというステップで頑張っていこうということです。

まず、「地域に徹底的にこだわる」のキーワードとしては、2つ目の「○」印の「域内需要」の獲得です。今まで道外製品を使っているものは、道産に置き換えていくことを重視したい。2つ目の「地域から新たな需要を掘り起こす」では、3つ目の「○」印で、道内、道民が抱えつつある課題にもものづくり力で貢献していくという考え方を示しております。そして3つ目「地域から日本、日本から世界へ」では、道内から世界へ打って出るということです。「地域のものづくりの力」、皆さんの持っている力を発揮しようということ、力を持っているのだから有効にかつ世界に活かしていこうというメッセージでございます。その中で「道の役割」としては、端的にいますと、ここに書いてあることを言い続ける、働きかけ続ける、共有化できるよう粘り強くやっていくということです。それから、皆さんに施策をご提案し、うまく使っていただけるように努力することを考えております。

3ページ目の「連携力」ですが、「農林水産業をはじめプロとプロとが手を結ぶものづくり」ということで、「趣旨」の2つ目の「○」印の「域内需要の獲得」ですが、道内のものづくりの力を発揮して、積極的に置き換えていこうではないかということです。それから「取組等」の1つ目の「○」印の「農林水産業や食品工業と連携」していき、その連携の先には個々の企業ばかりではなく、2つ目の「○」印、「ものづくり関係団体の大同団結」に向けて提案していきたいと考えております。「目標」については、「事業量目標」として考えております。といいますのは、工業出荷額などの数値はビジョンで掲げられているので、事業なり取組を増やしていく、プロセスの話になるので、目標設定自体もプロセスの中で考えていく必要があると考えています。

最後に「実践例」ということでいくつか載せていきたいと考えております。

4 ページ目の「人材力」ですが、「主役はものづくり“なでしこ”」ということで、女性を含めて、1つ目の「○」印であります「全員参加型社会への対応」として、若者や女性、高齢者それぞれが関わる全員参加型社会への対応ということを考えつつ、とりわけ、女性の視点、取組を生かしていきたいと考えております。「取組等」のそれぞれにはキーワードがございまして、最初の「○」印では「ものづくりの魅力の理解」ということで、採用の際、女性の応募そのものが少ない、ものづくりのイメージが十分に理解されていないということもあり、ものづくりの現場を見ていただいて、魅力を理解してもらいたいと思います。2つ目の○印では、「女性の積極的な登用」を進めようということ、3つ目の「○」印は社内施設、就業規則、保育施設等含めて、女性が長く働ける、「働きやすい職場」をつくろうということです。4つ目の「○」印は、「若者の学び直し」で実際に仕事に従事することと学ぶことが交互に行われ、人材力を高めていくということに取り組みましようということでございます。

5 ページ目の「ものづくりの一丁目一番地『技術力のワンランクアップ』」の「取組等」ですが、「技術力のワンランクアップ」を目指し、ワンランクアップのかけ声の下で、日々革新をしていただきたいと考えています。2つ目の「○」印では、自社の持つ製品の「技術を積極的にアピール」していくことがキーワードで、3つ目の「○」印では、「なかまづくり」で積極的に他と連携していくということでございます。

6 ページ目の「地域の『困った』に明日の芽を見つける」ですが、特に「取組等」の最初の「○」印の「経営者から従業員まで、意識を共有して全員参加型の経営を進め」て行こう、経営者の考え方、会社の目指す方向を従業員全員が共有して努力して行こうということです。2つ目の「○」印では、「提案型企业への転換」がキーワードで、3つ目の「○」印は「公的支援」をうまく使っていきましようということです。

詳細な形にしなかったのは、皆さんに読んで意識してもらいたいので、一般的な計画のような20ページや30ページものの、現状分析から始まってという形にせず、なるべく取組の方向とキーワードを理解してもらおう形にしております。

○関根 部会長

目標に、事業量による目標設定とありますが、具体的には。

○竹内 産業振興局長

イメージとしては、道が関わる研究会や産学官連携の枠組みの数などを考えています。例えば、農業関係団体とものづくり企業が連携して一つのプロジェクトを開発する枠組みを全道でいくつというようなものです。

○関根 部会長

人材力については。

○竹内 産業振興局長

例えば、公的な支援を活用して女性の働きやすい環境づくりをした件数や、ハローワークと連携して面接会を行い、何人女性を雇い入れたといった事業量を考えています。女性の就業比率5%アップなど、ビジョンに関わるような指標の設定は難しいので、具体的にどういう形で何をどう把握するかも含めて検討しているところです。女性の就業率では、「M字カーブ」の30代の2%アップもあるかもしれません。

○関根 部会長

ただ今、事務局から、「新たな展開方向」の素案（案）の説明がございました。

ものづくりの関係者が共有すべき共通テーマとして、「『地域のものづくり力』のアップ」を掲げ、ここを目指して、「連携力」、「人材力」、「技術力」、「経営力」という4つの視点で、取組を進めていこうという内容であったと思います。また、前回まで、議論された事項についても、反映がされていると思いますが、素案（案）について皆様からのご意見をお願いいたします。

まず、各委員の皆様からご発言いただき、その後、オブザーバーの皆様からご発言いただきます。お一人様、5分程度を目安に、名簿順に安孫子委員からお願いいたします。

○安孫子 委員

概ね納得できる内容だと思います。

個々の企業の技術力、競争力を高めることは、日々、製品をつくりながら取り組んでいます。この機械があればこの品物がつくれるということが日常的にあります。金額的に高いものであったりします。北海道の農産物を原料に製品をつくり、付加価値の高いものをつくることに役立ちたいが、お金のかかることもあり、有効な補助を利用しないといけないと思います。農業には積極的に予算が注入されていて、我々ももついろいろな情報を探しながら、公的な資金や援助を勉強しなければならないと思います。

○竹内 産業振興局長

今年度に入って、経済産業省で先端設備投資への補助が出来たのはチャンスです。先端設備は効率も高まるし、新しい商品づくりも可能となるので、我々も情報をそろえて提供していく努力をしていく必要があると考えています。

○安孫子 委員

矢継ぎ早に出てきて重複することもあり、折角のチャンスでもったいないので有効に活用したい。

○鴨田 委員

ちょっと気になったのは、「技術力」のところで、ワンランクアップという表現。企業は日常的に技術力アップのために努力している。技術力のワンランクアップは、今や当たり前のことだと思う。これまで道が取り組んできた自動車産業などの「量産モノ」への参入に対する企業支援は、参入すること、あるいは参入できないまでも、それを意識し、自動車産業等の生産体制・システムの一部でも地場企業が取り入れれば、高い技

術力、生産効率など高度なレベルの実現につながるし、チャレンジ意識の醸成にもなるということで推進してきたと思う。自動車関連産業に参入できるならチャレンジしましょう、多品種少量を得意としている企業など自動車関連産業に関われなくても、最高レベルのものづくりを目標にしましょうという取組をしてきたし、今もしていると思う。高度なものづくりへの意識付けや「量産モノ」における高度な生産システムを経験することで技術力を高めることができるし、新たな技術開発、製品づくりにつながるという観点で、種々の支援事業を進めてきているのではないか。本道の製造業においては、技術等の高レベルかを図りながら、新しいものに取り組んでいくことが必要である。農業のプロと連携してのものづくりも一つの方向性であるが、これからは、提案型のものづくりをしていくことが重要である。「技術のワンランクアップ」という表現は、そこまで踏み込んでいるのか疑問である。技術力を向上させることはもちろんのこと、それとともに、設計力、企画力、デザイン力、開発力を向上させることが重要で、それがなければ、今後の本道のものづくりは成り立たないのではないか。

それから、「地域の困った」の「地域」は、企業・産業ばかりではなく、住民などの社会的環境も含めたものを意識した表現と判断するが、それなら、はっきりさせた方が読む側からは理解しやすいのではないか。

○竹内 産業振興局長

2点目の「地域」は基本的に地域産業形態のイメージが強いです。農業であれば酪農、水田地域であったり、機械関係の企業が集積しているところ、食品が強いところ、木材などで、産業面での強み、弱みにもものづくり企業が貢献する姿をイメージしています。

自動車に関しては自動車の協議会があり、「行動計画」を作成しています。これまで10年間の取組で自動車関連企業が集積してきて、サプライチェーンを中心にしていくなりのステージだと思っていまして、協議会で「行動計画」の見直しを進め、ものづくりと双子の関係で、企業誘致や地場企業の参入、人材面も含めて見直そうと考えています。ものづくりと自動車の関係は、自動車を含めたものづくりを念頭に置いています。必ずしも自動車を目指していない企業もあります。自動車を強調すると、自動車と取引をしないところはどうするという意見も地域にはありますので、それぞれの道を突き詰めていくことも大切で、頑張ってもらおうメッセージを出したいと考えています。自動車へ参入することを是とすることで多くの企業をカバーするのは難しい。ただし、自動車の持つQCDなど、様々なことを技術力アップに利用することは考えております。

○関根 部会長

鴨田委員から技術力の向上は当たり前すぎるという意見がありました。視点として「自社なりに最高レベルのものづくり」、「新しいことをしよう」、「提案型ものづくり」などのキーワードがありますが、各事業者が自分なりの視点をどうとるかということだと思いますので、ワンランクアップの中にそういうことを書き込んでいく考え方はあると思います。

「地域」のとらえ方ですが、地域の特性に見合っただけでそれぞれの企業に頑張ってもらおうということだと思いますので、その点をはっきり書いた方がよろしいのではないかと思います。

○竹内 産業振興局長

ワンランクアップでは「温すぎる」という意見だと思いますが、「ジャンプアップ」や「革新性あるものにチャレンジ」などもありますので、今後も意見を伺いながら、検討していきたい。地域の位置付けも検討させていただく。

○関根 部会長

「ワンランクアップ」という表現は、各層にとってわかりやすい表現かと思いますが、その内容を含めて事務局で検討してください。

○土谷 委員

「ほっかいどう産業振興ビジョン」の実現に向けて取組を加速するとありますが、目指す姿としてビジョンでは「経済波及効果の高い様々な産業群が重層的に展開する持続可能な自立型経済産業構造」と表現されていますが、この4つのテーマ、共通テーマをどうするのですか。

○竹内 産業振興局長

わかりやすい例でいうと、20年前「ワンランクアップ」を進めていて、どの企業にいても、「ワンランクアップ」というキャッチフレーズを社内で共有し、頑張ろうとキーワードとして使われていました。ここ10年くらい、認識を共有する取組をしてこなかったと思います。「自立型経済産業構造」は社内のキャッチフレーズにならないので、現実的に手の届くところから取組を進め、少しでも目標に近づけていく考え方で、計画と皆さんの日々の取組の間をつなぐ、加速の役割を持ったものをつくりたいのが趣旨です。「安全、安心なものづくり」が皆さんに受け入れられるのであればそれでもよくて、そういうものを探したときに、今地域に元気がないので、地域の力を信じながら、ものづくりが地域を盛り上げる、貢献できる主役になろうという意識にたってもらえるものにしたいと考えています。

○土谷 委員

局長の気持ちはすごく理解します。

ワンランクアップをやって現実的にどれだけの企業が取組んで伸びてきたのですか。

○竹内 産業振興局長

研究開発型の企業、特に農業機械などは日々磨き上げてきていて、倒産している企業の確率も他の業界に比べると低いと思われます。ある企業は、自分の周りの土を理解していて、土にあった農業機械をつくり、道外でも通用する機械などをつくっています。単なるキャッチフレーズだったかもしれないが、がんばり続ける力になったと思っています。ワンランクアップで具体的な売り上げのアップなどの成果を示すのは難しいです。

○土谷 委員

局長のお気持ちは良く分かります。パッと見たときにそうだとは思いますが、心は動かされない。以前、夢の話をしました。夢というのはアウトプットが明確になってい

て、夢が持てるから強い意志が生まれ、強い意思があるからチャレンジすることに繋がっていきと思います。

「連携力」だけでもいろんな夢を描くことが出来る。例えば、官民一体となって、北海道を何かの一大産地にしようということをアウトプットに掲げ、道がコーディネートするとなるとおもしろいと思える人が出てくる。北海道で年に100本プロジェクトがあれば、参加できる企業も多くなるし、アウトプットに具体的な夢を持って動けると思っています。局長の話も理解できるのですが、インパクトがあるかどうか。

女性の雇用でいうと、男女の区別は出来ないなので、現実的に法律の関係でどうなのでしょうか。

○竹内 産業振興局長

女性だけの採用は出来ないと思いますが、道外のものづくりの盛んな地域と同様に、作業服を着て歩くことを当たり前姿として見る地域をつくりたいと思っています。

○関根 部会長

土谷委員から、夢、アウトプットを明確化することで、そこに強い意志と成し遂げる力が発生し、それが日々の努力に繋がり、アウトプットに繋がっていい循環になるというお話でしたが、各経営者の方々、事業運営上それぞれ考えがあると思いますので、キーワードに具体的にそのような視点が加えられるかどうか事務局で検討してください。

○日詰 委員

北海道は米どころになりました。生産者の方々がPDCAの繰り返しでここまで来たと思います。失敗を重ね対応を考えることが、技術力のワンランクアップに繋がることだと思います。

「主役はものづくり“なでしこ”」で、女性の採用5%アップという目標の話がありましたが、当社のように鋳物という重量物を製造している業種ではなかなか難しく、個々の業種によって向き不向きがありますので決められると困ります。

当社には来年65歳になる高齢者の技術者が4名おりますが、皆さん技術を持っていて元気です。年金も受給されていますから、賃金は補填する分で十分だと思いますので、元気な高齢者を積極的に採用するのもいいのではないかと思います。

○竹内 産業振興局長

目標は、例えばということでお話ししましたので検討していきます。

○関根 部会長

わかりやすいキャッチコピーということで「ものづくり“なでしこ”」として記載されていると思います。趣旨にありますように、「全員参加型社会への対応」という中で、特に女性をとというつくりになっています。企業によって男性の採用や高齢者の活用など、いろいろな視点があると思いますので、キャッチコピーと現実との整合性をどのようにとっていくかを事務局でお考えいただければと思います。

○北海道農業機械工業会 原 専務理事

「連携力」ですが、互いに組んで良かったということは、何かが出来て、販売されて、成功したときの結果です。連携しましょうという話が合っても、出口がないと途中でだめになってしまうので、販売や販路も含めたニュアンスがないと連携する気にならないと思います。技術力を持った両者が組んでもものができるか、いいものが出てくるかどうかが別の話になるので、それを含めた取組が分かる感じのものを入れてもらうといいと思います。

人材の育成が非常に大事だと思います。「人材力」に書かれている内容の印象ではスキル向上の感じがします。今の社会はそれだけでは人材という評価にならないので、幅広い視点の人を育てなければならないというニュアンスが出ないかと思っています。同じ技術でもレベルがあり、評価の仕方、日本国内は共通でも外へ出ると違うので、対等に話をしなければならぬ力量が求められるので、人材の評価や育成の在り方がないと、スキル一点だけでは浮ききれないと思っています。農業機械もでこぼこがありますが、そういう視点がないと殻から外に出れない、サイズが大きくなならない。技術力が上がるのと売れるのは別ですので、ワンランクアップは社内であっても、対外的に見ると上がっていないといういろいろな目で見られるので、作る人たちの人材の力を持ち上げる目標があるといいと思います。

○北海道総合研究機構 ものづくり支援センター 畑沢 研究主幹

「展開方向」に関しては、キャッチフレーズがキーワードであるという話があったので、こういう形になると思いますが、企業から見るともう少し具体的なイメージだとか、具体的な方策を提示した方が企業はやりやすいと感じた。産業振興ビジョンの実現を加速と書いてあって、ビジョンには細かく目標が掲げられていて、「連携力」、「人材力」、「技術力」、「経営力」のキーワードが加速させるために必要な項目としてあげられていると思うが、加速するのであればこの部分について具体的な項目があった方が加速すると思います。どうしてもキャッチフレーズ、キーワードだけをあげても、そのような方向性は必要との意見はでると思うが、何年か経った後、キャッチフレーズだけで具体的に加速したのかどうか弱い感じがする。

私は連携が重要と考えていて、「連携力」の取組の表現が、「人材力」の取組と比べると、ざっくりとした表現になっているので、キャッチフレーズプラス細かい取組について、もう少し具体例を示していただければいいと思いました。

○北海道職業能力開発大学校 前田 校長

全体的な印象として積極性に欠けると思います。ワンランクアップは既存の技術の中でのワンランクアップだと思いますが、私はオンリーワンの技術を目指すべきだと思います。企業がオンリーワンを目指すのは難しいので、行政の支援が重要だと考えています。実行あるものとするためには、キャッチフレーズではなく仕組みづくりが必要と強く感じています。

数値目標を考えているようですが、評価が簡単なので適切でない目標を設定した場合は数値目標が目的となって、本来のものとかげ離れてしまうので、何を事業量とするかは慎重な議論が必要だと思います。

○竹内 産業振興局長

誤解しないでいただきたいのですが、キャッチフレーズだけをつくるために行っているのではなく、「展開方向」を進めていくための施策をどうするか、新しい施策が必要かどうかとも吟味しています。一般定な計画であれば、目標があって、道の施策が並んでいて、道の行動の準則みたいになっているものが多いです。この「展開方向」は、道の行動を決めるのではなく、例えば、労働局との連携で行くと、道でものづくり企業の見学ツアーを10回行い、労働局が面接会をするといった支援機関相互が連携して力を集中していくことも考えています。従来の計画のように、道の取組だけを並べるのではなく、工業会などの関係機関に提案もするし、一緒にやっていくことを次のステップで考えています。

○厚生労働省 北海道労働局 志村 求職者支援室長

人材育成の観点で、私は今年の3月まで、千歳のハローワークにいましたが、自動車産業の会社で女性が来てくれないという話がよくありました。北海道の人材は優秀で、特に女性を増やしたいが、北海道の女性は来てくれないという話がありました。「M字カーブ」というのがありまして、女性の働く割合が子育て時期の年齢で下がっています。全国平均と比べて、北海道はかなり下回っています。社会に出た女性が働き続けることが大切です。ものづくりでは、食品製造関係は女性が多いが、工業製品はなかなか来てくれないので、高校生や大学生に目を向けてもらうためには、最終的には親の理解が必要と考えました。そういう意味では、道の情報発信を使って、ものづくりのすばらしさを道民に知らせていけば、女性だけではなく、高齢者、若者にもおもしろさが伝わるのではないかと感じています。

○関根 部会長

親御さんの意識を変えていく具体的な策をとというお話でした。

目指すべき方向性をより具体的な言葉で語ろうというのがキャッチフレーズの意味で、これを取組の中にどう活かしていくのか、なでしこではトイレ・更衣室など具体的なものがありますが、その他のところでは、そこまで具体的ではない部分もありますので、平仄をどこまで合わせられるか、よりわかりやすい取組を書き込むことを検討いただきたいと思います。

○竹内 産業振興局長

ものづくりなでしこは、気合いを入れているので深くなっていると思います。

(2) その他

○関根 部会長

オブザーバーの皆様ありがとうございます。部会の開催は今回が最後という予定ですので、この際、皆様からご発言がありましたらお願いします。

○北海道職業能力開発大学校 前田 校長

仕組みづくりの話をしました。仕組みづくりには予算が必要になります。道はどういう形で積み上げていただけるのでしょうか。最初のきっかけはどのような形でしていけばいいのでしょうか。

○竹内 産業振興局長

仕組みづくりの伝統的な方法としては、たくさんの機関が集まり、協議会を作って進めるのがありますが、伝統的すぎて今の時代にあわないと思います。最近の動きは、金融機関を交えたり、連携自体が多様化し、数も多くなってきましたので、伝統的な仕組みづくりで魂を腐らせてしまうより、一つ一つの事業を所管するところとそれぞれの取組のパートナーごとと一緒に事業を進めていくことがいいと思っています。

例えば女性の参画、「なでしこ」であれば、労働局と当課のほか、道庁内の人材、雇用のセクションと一緒に連携し、面接会などは労働局でないとできないので、一種の一気に通貫的な取組が必要だと思います。これまでは道庁でバスツアーをして終わりというスタイルでしたが、そこに労働局とジョイントし、面接会を開催するという事業構築をしていきたい。これまでも道総研といろいろな事業で関わっていますが、そういったたくさんのジョイントの形をつくっていくことが大事だと考えています。

○北海道職業能力開発大学校 前田 校長

個々に提案するというのでしょうか。

○竹内 産業振興局長

そうです。こちらから提案を求めていくこともあります。

○関根 部会長

委員の皆様、他によろしいでしょうか。それではそろそろ時間ですので、これまでいただいた意見などにつきましては、事務局で整理を行い、12月に予定されている商工業振興審議会に報告いたします。報告内容に係る事務局との調整につきましては、私にご一任願いたいと思いますので、よろしく申し上げます。

最後に事務局から何かありますでしょうか。

○事務局

先ほどご説明しましたとおり、本日の議論を踏まえ、素案として取りまとめ、12月に商工業振興審議会に報告し、平行して、皆様にも、改めて文書でご意見を伺うこととしておりますので、その際には御協力をお願いいたします。

部会の開催については、先ほどお話しがありまして、今回は最後となります。委員の皆様、オブザーバーの皆様、お忙しい中、これまで、3回にわたり貴重なご意見等いただきまして、誠にありがとうございました。

4 閉 会

○関根 部会長

それでは、本日の会議を終了させていただきます。3回にわたり、委員、オブザーバーの皆様、お忙しいところありがとうございました。ご協力ありがとうございました。

出 席 者

【委員】◎部会長（五十音順、敬称略）

安孫子 俊之	江別製粉(株)	専務取締役
鴨田 秀一	室蘭工業大学	地域共同研究開発センター長
◎関根 久修	株式会社日本政策投資銀行	北海道支店長
土谷 敏行	株式会社土谷製作所	代表取締役社長
日詰 良子	日詰工業株式会社	代表取締役

【オブザーバー】（敬称略）

一般社団法人 北海道農業機械工業会	専務理事	原 令 幸
地方独立行政法人 北海道総合研究機構		
産業技術研究本部 ものづくり支援センター	研究主幹	畑 沢 賢 一
独立行政法人 高齢・障害・求職者雇用支援機構		
北海道職業能力開発大学校	校 長	前 田 康 二
厚生労働省 北海道労働局職業安定部	求職者支援室長	志 村 和 信